

---

# リベッチパーソン

桂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リベッチャパーソン

### 【NZコード】

N8145A

### 【作者名】

桂

### 【あらすじ】

魔王退治に行つた勇者。果たして魔王を倒せるのか？そして、村に住んでいる主人公はその結果のニュースを待つていた。たぶんコメディー冒険ストーリーだと思います。

## 第1話・むせやプロローグとは言ひ難い

この世界には魔王がいた…  
絶対的な力で支配している魔王が…

「ありきたりだなオイ！」

こいつ言い放つたのは一応勇者の【コウ・シャ】だ。  
あ、適当とかこのナシの方…

「適当だなオイイイイイ！」

…いからお前魔王倒しに行けや…！

「なにこのナレーター…？」

と言ひながら渋々魔王退治へと旅立つた…

「いや、強制かよ…」

そして、ユウ・シャは魔王の城に乗り…

「ちょっと、待てえええい！その間の話は！？…てゆーか俺一人！？仲間いないのかよ！？」

ユウ・シャは一人で勇ましく魔王の城に乗り込んだのだった。

「またしても強制！？しかもやっぱ一人かチクショオオオオ！…くそ、こうなればヤケジヤアアアア！」

そして魔王の城の玉座の間へ辿り着いたユウ・シャ。

「出て来いやマオオオオ！成敗してくれるうーー！」

ユウ・シャは壊れていた。

『フハハハハ、貴様などが私に勝てると思つてているのか？』

この口調というか偉そうな態度は、たぶん魔王の声だ。

「いいから早く出できやがれえええーー！」

『フツ、命知らずが。…良いだろ。』

一瞬暗くなつたと思つたら、そこには魔王がいた…

五人ほど。

「…………いや、多すぎじゃない？」

『さあ、始めようか！』

「いや、魔王って一人じゃ……」

ズゴーンー・ズゴーンー・ペチペチ、ゴン・バキ、ベキ、ゴキ、ドゴー  
ンー

「作者コノヤローディー！」

## 第2話・いんな旅立ち方つてアリなのか？

「はー?……階段から落ちた夢見つけました!」

今階段から落ちた夢見て飛び起きたのが、この物語の主人公【マハ・ビート】だ。

何がお前とか言わなによ。

「あ、もう一時か。お風のコースみなきやー!」

マハ・ビートはベットの下に落ちてこむロモンを取り、テレビをつけた。

ボン

『お風のコースです。先日、魔王を倒しに向かったコウ・シャさんが、今日未明、ボロボロになつて帰つてきました。どうやら魔王に負けてしまつたみたいです。彼は体力的にも精神的にもひどくダメージを受けたみたいで、

「クソ作者ー!」

と叫んでいました。これでは、いつ世界が救われるかわかりませんね…

以上、お風のコースでした。』

「…軽く世界やばいんじやね?」

## ピンポーン

ムラ・ビートの家のチャイムが鳴った。…「一かムラ・ビートって言ごづらにからビート」します。

「はーい。」

ビートは玄関に向かう。

ガチャ

「どうり様ですか…って長老…?」

「え…トよ、一ノ門…スを…み…たか…?」

「はー。てか長老、家に戻つたほうが良いですよー。顔が真つ青で、今にも死にそうじやないですかー。」

「う…一大…事に…寝てい…られ…る…か…ガハッ…?」

長老吐血。

「長老ーーーー? 口から血が出てますよー? 家で休まないとホント死にますってえええーー!」

「お…前に…」の…世…界を…救つてき…て…ほし…のじや…」

「…?なぜ僕に?僕にそんな力は…」

「ああ…ない…」

え――！？じゃあホント今なぜ僕に頼んだ！？

「だが、お前に……は……『フフシ』」

多量出血および呼吸困難により長老死亡。

「長老…………なぜ大切な事言う前に死ぬんですか！？……ハッ！まさか、魔王か！？長老が僕に何かを言うのを阻止しようとして……ゆるさんぞ、魔王よ…………」

ビートは自分の思い込みで旅立ちを決めたのだった。

「あ、テレビ消すの忘れた！」

お前もう帰れ！！！

### 第3話・じんな仲間いたら嫌だと思つや

「…魔王の城に行くのは良いけど、さすがに一人じゃキツイよな。」

とゆーことで、ビートは仲間を求めて町を探しに行つた。

…そして「探すこと2時間、ようやく町を見つけた。

「ヤレカ———！」

いや、おかしいだろその発言は…

町の中

「ふう、やつとついたよ…村から町までの距離ありすぎだらーつた  
く…」

そんなことを愚痴つていると、町の人らしき人がビートに話し掛け

てきた。

「町の人らしき人つて、普通に町の人で良いだろー。」

「えーーーーー? それナレーターに言つて下さいよー。」

と、思わずツッコミを入れたビート。

「あ、スマン。ナレーターが変なこと言つてたので、つい…」

町の人は詰まらない事を言つた。

「といふでこの町に仲間になつてくれそうな人つていませんか?」

「仲間になつてくれそうな人? うん… 酒場にでも行つてみればい  
るんじゃない?」

ヒューリーことビートは酒場に向かつた。

酒場

「未成年者はお断わりだよー」

軽くつまみだされました。

「やりやないかー。」

「は～、仲間になってくれそうな人いなかな～」

とか言つていると、ビートのところに一人の男が近づいて來た。

「ア～仲間ニナツテクレヨ。」

え！ いきなり！ ？ まさかの展開だよこれ～！ ？ ！ ？  
つーかこつちが仲間欲しいんだけど！ ！

「ムリデスカ～？」

「いや、やめときま～」

「キサマニ拒否権ハナ～イ。フハハハハ！」

なんなのこの金髪の外人！ ？ 拒否権なしつて… 強制じゃねーかああ  
ああ～～！

「僕をなめんじゃねええ！」

ドゴッ！

あ～痛そつ。ビートの腹にボディーブローが入つたよ。

「ぐふう！」

「フハハハ、人ガゴミノヨウダ！」

「イツ仲間にする氣あんの！？」

「サア、ドウスル？ 私ニ降服スル氣ニナツタカ？」

「あれ？ やつをと言つてる」と変わつてね！？ やつぱ仲間にする氣ねえよ」「イツ――！」

「サア、サアサア！――！」

「く、これ以上の攻撃は耐えられん！ でも降服はしたくないし…ヨシ、ここは交渉してみるか！」

「わ、わかった。だけど一つ条件がある。」

「ジョーケン？」

「魔王倒すまで僕の仲間になつてくれないか？」

「デワ、魔王倒シタ後ハ私ニツキアツテクレルンデスネ？」

「うん。それで良いなら僕も良いよ」

「オーモソレナラ〇キスヨー共一戦イマショウ、同士ヨー！」

「話わかる人でよかつた！」

「僕、ビートって言います。あなたの名前は？」

「ジョージテース。ヨロシクネ」

「うじてジョージは仲間（？）になつた。

## 第4話・主人公だからって強くはないぜ

今夜は野宿らしよ。

「…………ジョージさん？これ、なんですか？」

ビートの前には、異様な臭いを放つなんか黒い物体があった。

「アーソレデスカ？ソレハ【フライパン】デスヨ。知ラナインデスカ？」

ええええ！？フライパンってこんなだつたつけ！？確かに黒いイメージもあるが、これは行き過ぎだろ！…！  
つーかなぜフライパン持つてんの？…よし、聞いてみよう…

「それよりなんでフライパン持つてるんですか？」

「料理スルタメニキマツテルジャナイデスカ～」

まさかこれで今夜の料理作る気！？そんなことしたら料理にフライパンの焦げ目＆臭いが移っちゃうよ～！

「ジョージさん、もちろんそれ洗いますよね？」

「ハハハハ、ダイジョーブ！コレハ焦ルタビニ料理ガ絶品ニナル代物ナンデスヨ。」



「エ？ 騙サレタダケテ料理二ハ使エルンジャナインテスカ？」

「いや、そんなに焦げてたらムリですか…て、あー…！ 材料全部使っちゃってるよ…どうするんですか…」これじゃ料理食えませんよ…？」

「チクショー…！」

「ちよ、叫ばないで下さい！ モンスター来たらビリするんですか？」

「…ソレテスヨー！ モンスター呼ンテ、ソイツラ食エバ良インテスヨー！」

「まあ良い案だと思いますが、ジヨージさん武器なしで大丈夫ですか？ 僕は剣あるから大丈夫ですが…」

「私ノ武器ハコノ肉体一ツサ！」

「そーですか。」

「イキマスヨ、ビート？」

「いつでもOKですー。」

「…セーの…。」

「ソイヤー……………。」

なんだその掛け声みたいな叫び方。

ザザザザザ！

「フッ、来タミタイデスネ」

「そうですね。」

そう言いながらジョージはファイティングポーズを取り、ビートは剣を鞘から抜いた。

すると、オオカミみたいなモンスターが15体ほどがあらわれた。

「15体って、結構多いんじゃない?」

「普通デスヨ。」

敵がなんかすごい吠えでます。  
ウォーンって。

「…そろそろ殺りますか?」

「モチデース!」

そう言って、二人は敵に突っ込んで行った。

ビートは剣で敵一体を切り捨てた!が、後ろから頭を噛られ、剣を振り回す。

目の前にいた敵2体を運良く倒したものの、今だに敵は頭を噛つている。

さらに剣を持てる右腕と、左足も噛られた。

「助けてー!ヘルプ、ヘルプミーー!」

ジョージは敵一体目を掴んで投げ付ける。すると、もう一体が飛び付いてきた!

が、ジョージのボディーブローが炸裂!一撃ですね。

ビビッた敵は逃亡し、残りは3体。ビートを噛んでる奴も合わせる  
と6体だ。

「ジョージ・バズーカー！」

ジョージの体から出た光線的なものが敵3体を一瞬で消し去った。  
「強！」

「ヘルプ、ヘルプミー！」

「オーダ丈夫デスカ？今助ケマース。」

ジョージは、ビートの頭に噛み付いてる奴と、右腕に噛み付いてる  
奴を引き剥がし、この2体の頭どうしをぶつけた。

ゴン！という音が辺りに鳴り響く。

ビートは左足に噛み付いてる奴を剣で倒したみたいだ。

瀕死だつたけど。

「救急箱持つてきといて良かつた～！一瞬お花畠が見えたもんな。」

「オーライナイスネー。」

「つるさいわ！」

「ソレヨツコレ、ドウヤツテ料理シマショウカ？」

「そりや、焼いて食べるでしょ？」

「火ハドースルンデスカ？」

「その持ち運びよつコソロでいいんじやないですか？」

「火力弱スギテ焼ケマセンヨー」

「頭使つて下せこよー。そーいう辺にある木の枝集めて燃やせば良いで  
しょーが！」

「ナルホドー！ テワ枝ヲ集メテ来マース。」

数分後

「集マリマシタヨー！」

「じやあそこへ置いて。」

で、色々準備して…

「じや、火付けるよ。」

「マツテマシター！」

カチッ

カチッ カチッ

「あれ？」

カチツ カチツ カチツ

「なんで火がつかないの？」

「ア、ソーカサツキ火ツケツ放シニシトイタママデシタ～」

「ガス切れがあああ！」

結局この日は何も食わなかつたそうですよ。

「ア、ジョージ・バズーカーデ焼ケバヨカツタデスネ。」

「言つのおせーよー。」

## 第5話・ヒロインのこんな感じだよな？

ただ今港町を探してくるピートー行。

「ピート、港町まで後どれくらい、デスカ？」

「う～ん、海が見えないからまだ先だと思つ。」

それよりジョージさん、大分しゃべり方が囁くなりましたね。」

「そうデスカ？ あまり氣にしてなかつたのでワカリマセンデー シタ。」

「

「…普通にす」」こな。」

そんな会話をしながら歩いていると、海が見えてきた。

「あ、ジョージさん！ 海が見えてきましたよー。」

「おお、海に来るの久しぶりデスネ。」

海を見てはしゃいでいるヒ、先日出来たオオカミみたいなモンスターが仲間を連れて、ざつと100体くらいあらわれた！

「ウソオオオオ！？ オイ、ナレーター！ 投げ遣りすぎだろーーー！」

「ビート、私に任せてクダサイ。」

「えー? 100体もいるのに大丈夫ですか!?」

「ダイジヨーブ、私には必殺技がありマース。」

そう言いながら敵の方へと向かつたジョージ。

「いきますヨー…ジョージ・ボンバー…！」

ジョージが技名を言つた瞬間、ジョージの周りが次々と爆破し、モンスター100体全て倒したようだ…

コイツ何者!?

「確かに強いけど…なんで技に自分の名前付けたがるんだ?」

確かに。

「さあウォーミングアップもしましたし、そろそろ港町へ行きマスカ〜。」

「… そうですね。」

「うおおおお！海が私をソンタウイール！！」

「はいはい、遊んでないで行きまくよ。船に乗りなきゃいけないんですか？」

港

「すいません、船のチケット2枚下さー。」

「2枚だね？はい、ビツルー！」

お金を支払い、船に向かうビート達。

…後の方がやけに騒がしい。なので後方に振り向いたビート。

「むうわてうえええい！」

「キヤーーー！痴漢よーーー！」

「ええ！？いや、あんたが船のチケット勝手に持つていつたから追い掛けてるんでしょうが！」

泥棒じゃん！！

「……あ、そこのアンタ！」

「？…まさか…僕？」

「 そうよ！アンタ以外に誰がいるの！？」

いや、前にジョージさんいぬ……っていね——！——あの野郎先に船乗  
りやがつたよチキショウ……

「ちょっと聞いてんの！？こんなか弱い美少女が野郎に追われてん  
だから助けてよ！」

か弱い女が泥棒なんかするか！！

では、一か自分で美少女とかしゃうなよ。…

「……で、僕にどうしようと？」

「あの野郎をどうにかして！」

「わかったよ。」

で、その野郎を説得中…

「… じ」とで、あの子の分のお金。」

「はい、確かに。今度から気を付けて下せよ。」

「どうもスマセンでした。」

… て、なんで僕があやまんの？  
つーかこの茶髪セミロングの女はなんなんだ！

図々し過ぎだろ…

え？ なんでつて、そりゃあ…

船のチケット買ってやつたは良いが、そのせいで同じ部屋になり、  
食い物とか全部奪われました… 大惨事だよ… クソウ。

「… で、君はいつたい何者だよ。」

「アタシ？ アタシはね… あれ？ 誰だっけ？」

「おこいこい！ なんで自分の名前忘れてるんだよ… つ普通そこは覚  
えてるだろおおおお！？」

「あ、思い出した！ アタシはフェイだよ！ 確か。」

「なんで自分の名前なのに自信持つて言えないんだよ…」

「いやー、アタシ物忘れが激しいんだよね…」

…なんか笑いながら言つてるが、それって結構ヤバいんじゃないの？

「あれ？そーいえばアタシなんでここここいるんだっけ？」

おいっいい！さつそくかあああああ！？

「ま、いつか！」

良くなーよーてか性格もアレだから余計たちワリイーよコレコレ  
エー！

「あ、そーいえばさ、アンタ一人で旅してんの？」

あ、まともな事聞いてきた。

「いや、僕以外にジョージって人がいるんだ。…あれ？そーいえば  
ジョージさんどこ行つたんだろ？」

その「る」ジョージは…

船の甲板

「ん~、この風がなんとも言えませんネ~」

船旅を満喫していた…

「ふ～ん、魔王退治ね～。ムリでしょー。」

あつさり、ザックリ良こやがつたよこのアマ...

「まあ、ここのアタシが入れば余裕だけどね」

「…まあ？」

「おー、そんなにその訳を聞きたいか？」

「いや、別に…」

「ならば教えて差し上げよう。」

いや、だから別に聞きたくねーから…

「何故ならこのアタシには…アレ?なんだけ?」

またかよおい…

「あ、魔法だった!」

「ああ、魔法ね…」

「それならジョージさんも使えますよ。」

「フッフッフ～、アタシのは、なんじょやこいつの魔法とは違いますよ～」

「わ～、ウッサ～。何このキャラ～？」

「で～、どう違うの～？」

「え～じやあ何この机で試してあげるよ～」

「う～～～～、フロイは窓際にある机を指をした。

ちなみに部屋は、よくあるホテルみたいな感じで、ビーチは出入口近くに腰を下ろして座っている。そしてフロイはベットを占領している形だ。

「で、その机に向する気～？」

「まあ見ててよ～」

てことだ、机に皿を並べてアート。

すると、何か黒いものが机を包み、一瞬にして机と黒いものが消えた！

「え～～？な、なにが起きたの～？」

「へへ～、凄いっしょ～？」

「う～うん。でもコレビーなってんの？」

「え～と、物体を無に還したんだよ。」

「物体を無に～？」

「うん。」

「す、凄い！確かにこの子がいれば魔王余裕かもしれないな…

「…あ、やーいえばフュイは何でこの船に…いや、何で旅なんかしてるの？」

「忘れた！」

「はい！…いや、覚えてるでしょ！…とか忘れたならなんで家に帰らないの…？」

「さあ～あと家の場所は忘れた！」

「なんだコイツ？バカ？  
まあ良いか。

「じやあ僕達と一緒に来ない？」

「え～メンドベーイ！」

「え～ダメだよな～。

「…あれ？今、何の話してたんだっけ？」

「やだな、今フェイが僕達と一緒に旅をするつて決めたとこじゃ  
ないか」！

「あ、そか」

バカで良かつた

「……で、アンタ誰？」

バカ過ぎた……

## 第6話・何だかんだで魔王の城つて近い（前書き）

更新遅くなりました。スマセンーついでにちょっと短いです、スマセンー！

## 第6話・何だかんだで魔王の城つて近い

やつとついたーー魔王の城！…早つ！…

ンへ、あのフライパンの貸しをかえす時が来まシタネー

「魔王め、長老の仇をとつてやる！」

「…えーと、何でこんなとこにこいんの、アタシ？」

それぞれの魔王への怨み（一人なんか違うけどね）を述べ、魔王の城へと歩きだす僕達。

あー最近ナレーター調子に乗つてるので、今度から僕視点で行きます。

…と、説明してたら城に着いたみたい。

「…でか！」

そう、奴の城は想像以上にでかかった。上を見上げると、首が痛くなるくらい。

「さあ行きますよ、皆サーーン。」

「…でも入り口が見当たりませんよ？」

「ーすればいいんデスヨ。」

そう言つと、ジョージさんはいつものよつて技を駆りながら壁を爆破した。

「ジョージ・バスター！」

ズゴーン！

！？なんか手から波動がでてた！スゴシ――！  
ジョージさんつていつたい何者だろ…

城内

ドスツ！ドスツ！ドスツ！

「うわあ――――！」

「危ないデース！」

「キヤ――――！」

この言葉からわかるよつて、僕達はあるモンスターから逃げている。

なんて説明したら良いんだろ？まあとにかく岩の固まりみたいな奴

『グオオオオ！』

…かな？

「…」、「危ない『テース…』」

「…『右の拳（？）』が…ダメだ、避けきれない…！」

「…無に還りな…」

その瞬間、奴の拳らしき物が消えた…まさかフェイ…？なんか一瞬キャラ変わったような…

「大丈夫？」

「うん、何とか…」

しかし、消えたのは拳だけだ。だからまたすぐに襲つてくるぞ… てかもう来てた。

『グオオオオオ…』

やばい、何かお怒りみたい…

「逃げるよ…」

「…何から？」

「うおい！こんな時に何やつてんだあああ…！」  
とにかく手を引っ張つてでも連れてかないと…死ぬんじゃない？

「しかたないか…行くよ…」

グイッ！

「え……！？」

その瞬間、フレイは奴に気付いたみたい。いや、さつきから何回も見てるけど、そのたびに記憶抹消されてんだもん。なにこの嫌がらせ？

「はあ、はあ、はあ……」

「フウ……何でこんなに疲れてんの？」

もづこいからそれ……ツツコモ! いれんのもメンディーし。

「オウ、この階段……いかにもデスネ。」

ジョージさんの言った通り、いかにも魔王の間へ続いているような階段だった。

「本当に、いかにもだね……いよいよ魔王とじつ対面かな？」

階段を上っていくと、いかにもなドビラがあった。

「フハイ、これ無に還して。」

「オツケー」

フェイが構えると黒い物体がトビラを包み、消しおった…軽く恐いよ。

『…………、わ…………の…………やくよ…………そ…………』

なんだ? 奥から声が聞こえる?

「魔王ーーよく聞こえないんだけど。」

『…………、わ…………し…………部屋…………よ…………そ…………』

「ちよ……何? 聞こえないから中に入るよ。」

うわ、中暗くてよく見えないな…

『フハハ…ゲホッ、私の…部屋へゴホゴホッ…ヒヒヒヒヒ…聞かてるだろおー』

やばい、なんか可哀想なんですけど

「オウ、魔王！よくもこんなフライパンを売り付けてくれマシタネ！借りは返しマスヨ！」

「…………」

お前もう帰れ。

『フツ威勢だけは良いようだな。だが、私達に勝てるかな？』

「そんのやつてみなきやわか……え？達……って？」

「どーゆうことだろ？」

『マイクアッパー！』

力チツ

「魔王五人いるつううつー？」



## 第6話・何だかんだで魔王の城つて近い（後書き）

いよいよ魔王との対決です！人気ないんでそろそろ完結しちゃおう  
と思つります（^\_^；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8145a/>

---

リベッチパーソン

2010年10月21日22時32分発行